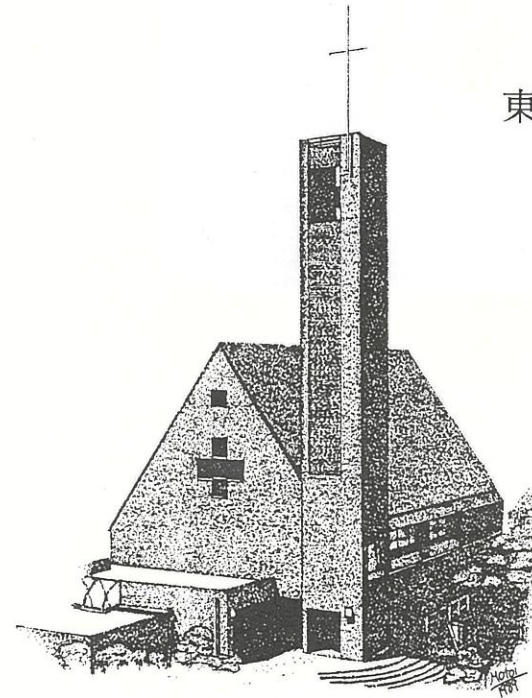


チャペル ブックレット No.4

—— 1990 春の宗教講演記録ほか ——

激動する現代史と
神のみことば

東京女子大学教授
池 明 観



名古屋学院大学 宗教部



池明観先生のご紹介

チ・ミョンクワン先生は、1924年のお生れで、韓国・国立ソウル大学校文
理科大学宗教学科を卒業され、同大学院で宗教哲学を専攻されました。
徳成女子大学教授、国立ソウル大学文理科大学講師、雑誌「思想界」主幹を
経て、1972年来日。

現在、東京女子大学現代文化学部教授。

著書に、「流れに抗して」「アジア宗教と福音の論理」「韓国現代史と教会史」
「破局の時代に生きる信仰」「韓国文化史」「チョゴリと鎧」などがあります。
1990年6月8日、本学宗教部主催の春の宗教講演会において、また、本学
附属図書館主催のライブラリー・セミナーにおいて講演していただきました。

目 次

激動する現代史と神のみことば
.....1

東アジア文化圏における日本と韓国
.....15

激動する現代史と神のみことば

講演の機会をあたえてくださったことを心から感謝いたします。

「激動する現代史と神のみことば」という題をかかげましたが、キリスト教は歴史をどのようにみているのか、ということをお話したいと思います。簡単な面白いお話ではありません。やや難しい話になるのではないかと思います。重い課題をみなさんにさしあげるつもりでお話いたします。

他の宗教に比べてキリスト教は「歴史」に注目している宗教であると言うことができます。歴史の中に神が働いたもうと考えているのです。神が宇宙と人間を創造し、支配し、維持したもうのだというのがキリスト教の信仰であります。インドの思想の中にある、「この世は無だ」あるいは「すべては空だ」というような考え方をキリスト教はしていません。ヒンドゥイズムの世界では長い間、歴史が書かれませんでした。なぜなら現実が意味あるものだとは考えなかったからです。キリスト教は現実が起こっている

すべてのことがら、意味にみちているものであるという考え方をしているのです。

「霧の中の風景」から
最近私が見た非常に印象深い映画のお話から始めたいと思います。それはギリシャの名監督、テオ・アングロプロスの作品で、いま東京で上映されている「霧の中の風景」という映画です。

このアングロプロスという監督は、1975年に「旅芸人の記録」というすばらしい映画を撮りました。また1984年に上映された「シテール島への船出」という問題作もあります。けれども「霧の中の風景」は、みなさんがご覧になって損をするといけませんから申し上げますが、映画そのものとしてはあまり面白いものではありません。

それなのに何故問題になる映画なのかということをお話ししながら、今日の問題に入っていきたいと思います。

それは12才の姉ヴァーラと5才になる弟アレクサンドロス、この二人が架空のお父さんを訪ねてドイツまで行こうとする寓話的なストーリーです。二人は夜になって寝床に入ってから、弟がお姉さんに「お話し聴かせて」とねだります。するとお姉さんは「また？」と言ってそれからこう始めます。「…初めに混沌があった…それから光が来た…」これはまさに旧約聖書、創世記第1章の最初の言葉です。「はじめに神は天と地を創造された。地は形なく、むなしく、やみが淵のおもてにあり…神は光あれと言われた…すると光があった。…神はその光と闇とを分けられた…」

この話をしているのです。いわば光ができて森羅万象が生まれ、よろずのものが創造されるわけです。

お姉さんがこう続けます。「そして光と闇が分かれ、大地と海が分かれ、川と湖と山が現れた。その後で花や木がでてきた。それに動物と鳥…」たぶんその後で人間も、という所でノックの音がきこえます。それはママのノックの音なのですが最後までママは映像には出てきません。

これが最初のシーンであります、フィナーレに至ってこの子どもたちは

千辛万苦の果てにようやく霧に紛れて国境を越えていきます。まだ霧は晴れていません。そこで姉ヴァーラの方が「怖いわ」と言います。すると今度は弟の方が「怖くない、…お話しをしてあげる」と言って「はじめに混沌があった。…それから光が来た」ともう一度旧約聖書の言葉を繰り返します。

そして霧が緩やかに晴れていって、むこうの木に抱かれるように、ふたりは歩いていきます。ふたりをつつんでいた霧がだんだん晴れていきます。そして光が少しずつさしてきます。

謎めいた映画であります、最初のシーンとこのフィナーレで、なぜ最初はお姉さんが創世記の物語を語り、最後は弟が語るのでしょうか。この二つを結びつけるのは一体どんなストーリーでありましょう。想像していただきたいと思います。

私が非常に驚きましたのは、ここにそのプログラムがありますが、ここにも、またこの他の新聞等の説明にも批評にも、なぜ最初と最後に、創世記の言葉があるか、それについて書いている人は誰もいません。

これは私は驚くべきことだと思います。映画評論の大家たちはなぜこれに

言及していないのでしょうか。これでこの映画を正しく観ていることになるのでしょうか。

なぜここに聖書の言葉が出てくるのか、みなさん考えてみてください。

この映画の意味は簡単です。光、いわば神の光がこの世にさしてきたけれども、この光がだんだん薄らいでいきます。そして反対に闇が濃くなってきます。これが人類の歴史であり、現代なのです。ふたりの子どもが国境を越える所にたどり着くまでの間は、いわばこの世の中を象徴しています。その旅路において出会うことは光を消失した闇の世界であるわけです。ですから「霧の中の風景」というわけです。霧は憂愁のシンボルではありませんか。

光がありません。そこでは天気も曇りであり、雨であり、雪であり、灰色の世界です。その中に描かれている人間は、無表情な人間であり、活力がない人間であり、動いているのか止まっているのか分からない人間が描かれています。ここには、いわば疎外された人間の姿があり、そこで真面目に生きようとすれば、牢屋にいくか、追放されるか、いずれにしても惨めな姿であるということ、象徴的に、詩的に描かれています。この映画自体が一篇の憂鬱

な詩であるということもできるでしょう。

アンゲロプロスはこれが世界だというのです。今我々はこんなに豊かだと思っているのに、こんなに自由で、こんなに楽しく、便利であると思っているのに、ほんとうはこの世界は灰色の世界であり、霧の中にある世界なのです。

これはなぜでしょう。これは哲学的な言葉では「置換」といいます。現在の状況を我々は、すばらしいものと思っているが、それを置き換えてみる、ということです。あるいは「異化」という言葉を使います。異なるものに化してみる、ということです。

キリスト教は聖書のみことばによって、今日我々が見ているような見方ではなくて、置き換えてみる見方をします。異化してみる見方をしています。そんなことをこのアンゲロプロス監督の映画もしているのではないかと思います。

私は、現代のこの世の中が、はたして幸せで、自由で、人間的なすばらしい時代であるだろうか、というような疑問を投げかけざるをえません。

一つの例をあげましょう。これは最近受けた衝撃的なできごとでしたが、

今年の4月29日の新聞に報道された身近な出来事を、今我々が住んでいる時代を異化して、あるいは置換してながめてみましょう。

その事件というのは、中国民航機のとっとり事件で日本に来た張振海容疑者が、28日午後7時20分に成田から北京の空港に着いたという簡単な報道です。日本は「日中友好のために」彼を送り返さなければなりません。我々は何でもないこととして、見逃していたかもしれませんが、もう一度考えてみましょう。

一人の人間が自分の自由をもとめて国を脱出しなければならないということが、現実にあるということは悲劇であります。しかし同時に彼を送り返さなければならない日本の現実も、これまた悲しい現実ではないでしょうか。

私は彼がハイジャックしてそのまま帰されたらよかったのと思います。けれども日本で裁判にかけられたために、自分が救われるためにそう言わなければならないのでしょう、中国共産党打倒ということを行いました。それでは彼は単なるハイジャック犯ではなくて政治犯になって帰っていったということです。

今の中国の状態で政治犯ということ

はどういうことであるかということ、我々は知っています。彼は裁判がなければ、あんなことは言わなくてすんだのです。

聖書のみことばは我々にそのような現代の中の「裂け目」「ひび」「現代が貧しく歪んでいる姿」それを見せてくれるものです。いわば聖書のみことばは、現代においてもいかなる時代においても根源的批判を試みるのです。

万物流転

つぎに聖書のみことばによって、東欧などあのように激動するこの時代をどのように見ることができるとかについて、三つのことを指摘してみたいと思います。

第一は「万物流転」という有名なヘラクレイトスの言葉です。

昨年(1989年)11月9日、ベルリンの壁崩壊の日、その前夜まで、我々は誰もそうは思いませんでした。

岩波書店の『世界』(1990年4月号)の臨時増刊(『東欧革命』)の「東欧通信」で藤村信という人が「万物は流転する」という言葉をつかっています。そしてこう言っています。これはチェコスロバキアのことですが

「半年前までは危険人物として監獄生活を送っていた文学者が大統領になり、また地下鉄のボイラー焚きをやっていた人物が外務大臣におさまり、田舎の刑務所の囚人が副首相の椅子につくために看守に送られてブラハへやってきました、まさにカフカの世界のような出来事です」と、こんな風に言っています。

そして彼はソ連の作家で弾圧を受けたグロスマンの1963年の小説「万物は流転する」の結びにある主人公の言葉を引用しています。それは「摩天楼はいかに巨大であれ、大砲はいかに強力であれ、国家権力はいかに無限であれ、帝国はいかに強大であれ、そのようなものは煙であり、霧であって、消えていくであろう」というものです。

藤村さんは最後に「すべての非人間的なことは、馬鹿げた、無用のものなのだ」という言葉も引用しています。

強大な力、我々としては、恐れをなさざるを得ない力、権力も神のメシヤの光に照してみれば、また文学者たちがやったように、置換し、異化して見るならばそれは何でもないのだ、ということです。それはまるで霧であり、煙であり、消え去っていくものであります。こういう考え方があります。

これはまた聖書の中に示されている初代のキリスト者たちが巨大なローマ国家を眺めた時の目つきでした。

新約聖書のペテロの第1の手紙、これは紀元1世紀頃に書かれたといわれていますが、ここに「人はみな草のごとく、その栄華はみな草の花に似ている。草は枯れ、花は散る。しかし、主の言葉は、とこしえに残る」とあります。こういう見方があります。

アウグスチヌスも「地上のいかなる力も腐敗し、崩れていくのである。強大な国家も絶対視してはならない。地上のいかなる物であろうとも、絶対視すれば、それは真理に背くことであり、偶像崇拜である」このように考えたのであります。

この「万物流転」ということが、神のみことばによって世界の歴史を照してみた時に我々が考えなければならないことであります。

歴史には方向がある

第二は、「……にもかかわらずキリスト教では神が歴史を支配したもう」という考え方をすることです。万物流転ということ、東洋の宗教で言うならば、諸行は無常である

から、この世の中を無と考え、空と観じて、あるいは迷妄と観じて、それを悟り、それから離れていかななくてはならない、この世の中から脱出しない、この世の中から脱出しない、というように考えるでしょう。

しかしキリスト教ではそうは考えません。そういう歴史の中で神は支配したもう。その歴史の中で神は働いたもうが故に、この歴史を離れてはならない。この歴史の中でみんなと共によこび、怒り、あるいは悲しみ、楽しみながら、この人生を背負っていかなくてはならない。このように聖書は教えているのです。

さきほど引用しました聖書のみことばが、まさにそうです。「榮華はみな草の花に似ている。草は枯れ、花は散る。しかし主の言葉はとこしえに残る」これがキリスト教的世界観であると言えると思います。

ここでひとつの例をみなさんに申し上げます。みなさんはフランス人のトックビルをご存じだと思います。彼は1831年から1832年までアメリカを訪問して『アメリカの民主主義』というあの分厚い本を書きました。今ではそれは民主主義の古典と呼ばれています。この本の中でトックビルは、当時

19世紀において「過去 700年の歴史の中で、結果的に『平等』に有利に貢献することにならなかった重要な事件はほとんどなかった」と言っています。

言葉を変えて言えば「今までの 700年間に起こったすべての事件は、人間の平等と民主主義を進めるために役立った事件である」ということです。

歴史を見る時はマクロな見方をしないといけません。我々は日常あまり小さなことにとらわれて、せせこましくなっています。歴史の流れを悠然と見るような目を持たなくてはなりません。

彼があげている例を見ると、とても面白いものがあります。

たとえば十字軍がありました。あるいはイギリスにおいて貴族が戦争をしました。それは結果的には何を意味したかということ、貴族の命を奪い、その領地を分割させるのに役立ったではないか、そういうのです。

また鉄砲が発明されました。この鉄砲によって、戦場では平民と貴族が平等にされたではないか、と言います。

それから印刷術が発見されました。それによって、だれにも同じ情報が与えられるようになったのです。

彼は郵便については、宮廷にも、わ

らぶきの平民の家にも同じ啓蒙を運んでくれた、と言っています。

そしてプロテスタントのキリスト教は、すべての人に同じように天国に行く道を示してくれたと言ったのです。

その中で一番面白いことはこれです。平等と民主主義のために努力した人たちだけではなく、それにさからおうとした人たちも結果的には平等と民主主義を進めるのに役立ったと言うのです。

ここで彼は「このすべてが混乱を醸し出しているが、同じ道を走ってきた。すべての人が益となるように働いてきた。ある人は自分の意図に反して、またある人は神のみ手の中で無意識的に方向を見定めぬままに道具になることによって」と書いています。

こういうようにトックビルは民主主義や平等が発展すると、今日の状況を見て、過去にもそのような考えを投影し、また未来をも予測したのでした。

E. H. カーも言っているように、未来に対する正しい展望を持たない時は、過去の歴史も正しく理解することができません。また過去の歴史を正しく見られない人は、未来に対して正しい展望を持つことはできないし、今日において正しい考えを持つことはできない

いのです。

トックビルの言葉の中で、特に注目したいのは「すべての人が益となるように働いてきた」すなわち「結果的にはすべての人々に平等と民主主義がゆきわたるように、歴史は働いてきた」という言葉です。これはまさに聖書のローマ人への手紙 8章28節の言葉です。そこには「神は、神を愛する者たち、すなわち、ご計画に従って召された者たちと共に働いて、万事を益となるようにして下さることを、わたしたちは知っている」と語られています。

色々いざこざがあり、混乱があり、問題がありますが、しかし神は歴史を善の方向へと向けているのであります。色々反動があり、悲劇がありますが、歴史を「益となる」方向へと神は働いたもうのであります。

神は「神を愛する者たち」、人間的、理性的に正しく生きようとする人々に益となるように働いたもうのであります。

これがキリスト教的考え方です。

真理の勝利を信じる、歴史に対する楽観論です。それを持っているために、今苦しくても、勝利を確信して、耐えていくのです。今は苦しくても、悪や非人間的なことに加担しないので

あります。神の勝利を信じるがゆえに、「寄らば大樹の蔭」というような生き方はしないのであります。日々正しいことを分別して生きていくのです。このように歴史には意味があると考えます。

反キリストの問題

三番目には、それでは我々はどう言われるかもしれません。「神様がみんなしてくださるなら我々は黙っていてもいいではないか」と。しかしそうではないのです。これが面白いところで、私は一般命題と命令命題の関係をこのように考えるわけですが、歴史がそのように動くと言え、我々はそのために働かなくてはならないということになります。その方向に向って我々も努力しなければいけないのです。

一般命題として「歴史はそのように動く」と言え、それゆえに我々はその方向に向って戦っていかなくてはならない、生きていかななくてはならない、という命令命題が成立するので、逆に歴史というものが、悪の方向に向うとなると、我々は悪をしても自分の利益のためにのみ働けばそれでい

いのだ、と思うようになるわけです。

また神の勝利が近づけば近づくほど、悪魔の勢力は強くなる、というのがキリスト教的世界観なのであります。

これを普通の歴史観に戻して考えれば、進歩があればあるほど、それと同じように反動が強くなる、というのがキリスト教の歴史観なのです。それでキリストが現れば、反キリストが現れるというのです。

キリスト教はこの世の中で、悪と善の勢力が戦って、だんだんと悪の勢力が弱くなり、善が勝利するというような安易な楽観論は持っていません。

さきほど申しましたローマ人への手紙の中にも「神は、神を愛するものたち、すなわちご計画にしたがって召されたものたちと共に働いて、万事を益となるようにして下さることを、わたしたちは知っている」と言われています。

単に待っていることではありません。勝利を信じているからこそ、雄々しく戦い、今この瞬間において正しく生きていくことなのであります。

聖書のみことばをもう一ヶ所だけ引用したいと思いますが、ヨハネの第1の手紙に有名な言葉があります。

「子供たちよ。今は終りの時である。あなたがたがかねて反キリストが来ると聞いていたように、今や多くの反キリストが現れてきた」。「終りの時」「キリストが来る時」そういう時であるのに、一方ではますます反キリストが猛けり狂っている、というような歴史観であります。

これを裏返していえば、こう言えるでしょう。世俗的な力、反人間的、非人間的な力が最も強くなった時が、実は終りの時です。非理性的なばかげたことが日常茶飯事のように行われる時が、実は終りの時なのです。その勢力が崩れる時なのです。国の権力が最大のもとして我々を圧倒的に支配しようとする時、それが実は終りの時なのであります。豊かさを謳歌して我々が奢っている時、そしてそのような力にみんなが屈しているように見える時、それが実は終りの時なのであります。

これがキリスト教的歴史観であります。

だから我々はナチスが崩壊する時がわからないのです。東欧圏があんなに変るものわからないのです。なぜならば我々の目には東欧圏の団結がますます固くなっているように見えるからで

す。あるいはナチスの場合もナチスがますますたけり狂っているように見えるから、それが崩れるとは思わないのです。我々の目にはそう見えるのですが、聖書のみことばに照してそれを置き換えて見れば、もう既にそこに終末の日は近づいているのです。そういう終末の日が来た時に、ベルリンの壁が崩壊した時に、ナチスが崩壊する時に、我々はあわてふためくのです。なぜならば世間だけ見ていて、神のみわざを見ることができなかったからです。

そして我々はベルリンの壁が崩壊した時のように、ほんとうに人間は歴史を知らないものである、また歴史の未来なんてまったく知ることができない、という無知と無能を告白せざるを得なくなるのです。

いかに生きるか

それではこういう中で我々は一体どう生きるべきか、あるいはキリスト者はどう生きようとするのでしょうか。キリスト者も人間ですから色々迷いはあるし、まちがいがいっぱいあります。教会の歴史においても迷いがあり、間違いがいっぱいありました。

理想的な意味においてはキリスト教は、あるいはキリスト者はこのように生きていくべきであるといえとすれば、それは一体何でありましょうか。

これをお話するためにある一つの前提を申し上げなくてはなりません。たとえばタイによる福音書5章をみますとそこには有名な「山上の教え」があります。

「わたしはあなたがたに言う。悪人に手向うな。もし、だれかがあなたの右の頬を打つなら、ほかの頬をも向けてやりなさい」と聖書は語っています。これはたいへんなことです。右の頬を打たれたら左の頬もさしだすように生きていかなければならない。それが真の意味の愛である、というならば、特別な聖者でないかぎり、誰もそのとおり生きていける人はいません。それではどう生きるのでしょうか。もう一步すすんで、こういうような生き方は、聖者である個人ならできるかもしれないけれども、国家はそんなことはできません。他の国が攻めてくるのに、「どうぞお入りなさいというように」まるでトルストイの『イワンのばか』のようなことは実際ありえないのではないのでしょうか。

それではキリスト教の聖書のみこと

ばは、現代の我々の生活に何の足しにもならないではないか。ここに我々の問題があります。

永遠なる理想としての生き方、ほんとうの意味での生き方は、右の頬を打たれたら左の頬を向けてやるような、美しい心で生きなくてはならないけれども、それは永遠なる理想であるが故に、この現実の社会の中では、そのまま生きられるものではありません。それをこの娑婆の世界で、どの点まで適応して生きていくのか、自分たちが行動しながらそれが、私はイエスの言葉をそのとおり生きていけるとは思えません。これが問題です。

常にイエスの言葉を聞きながら「今日の状況においてはこう生きます。だがこれは完全なる愛ではありません。罪深き者であります、この姿勢で生きていこうと思います。どうか許してください」という生き方が、せいぜいわれわれのできることではないでしょうか。

だからいかなる善き行為も、自分が正しい行動をしているというような傲慢さはそこにはありません。「私はできるかぎりの所までしますから、人間というものはこんなものですから、許してください」というように行動する

のです。

神のみことばに照らして、我々が為すことのできる、最高のものを求める、これがキリスト教的に生きる人生なのであります。それではそういうことがいかに重要であるか、一例をあげて申し上げようと思います。

私は個人的には、イギリスの歴史家アーノルド・トインビーの影響を非常に強く受けています。そのトインビーが1947年の講演「国際的展望」の中で、しみじみと語っているのは「今、反共主義のもとでソ連と対立しながら我々はソ連をノックアウトしたい、共産主義に打撃を与えて一掃してしまいたい、という気持ちになっている。しかしそんなことをしてはならない。相手をノックアウトするというのは、相手だけを痛みつけるのではなく、ノックアウトする側も実に両方とも、ものすごい精神的荒廃をこうむることになる。今、たとえ協力はできなくても、少なくとも、ノックアウトブローを考へてはならない」ということです。

そして「我々はいかに困難であっても、彼ら、共産主義勢力と対話を続けよう。敵を全滅しようなどと思つてはならない。どうすれば仲良くできるかを考えていこう。そうすればいつかは

歴史が変ってきて、ミドルウエイ、中間の道が現れてくるであろう。耐えながら、その日を待とう。その歴史は我々に与えられるにちがいない」というようなことを言いました。

こうしてトインビーは「イギリスやヨーロッパが、自分たちだけが繁栄することを誇ってはならない。そのように自分たちだけが繁栄したことによって、世界がイギリスやヨーロッパを研究するのではなくて、イギリスやヨーロッパが困難な状況においても平和を保ち、人類を結合させようと努力した、その役割のために研究するようになってほしい」と言ったのです。

これは、いかなる状況においても愛しなさい、敵をも愛しなさい、という聖書のみ言葉を今日の国際的状況においてどのように考えるかを示しているといえましょう。まさにヨーロッパの英知といえるかもしれません。なぜスターリンと対話をするのか、あれは悪魔だから戦争をしてでも排除してはならない、という反共的メンタリティのなかで、耐えながら対話をし、仲良くしようとし、相手に脅威を与えないとする努力を続けている間に、新しい歴史が今我々の目の前に到来してきたといえるのではないのでしょうか。

私は今このトインビーの言った言葉を日本に向かって言いたいと思います。日本を研究する人は増えてきました。日本を日本が日本自身のために成功したことで研究するだけではなく、それ以上に日本が人類の結合のために、世界の平和のために、東アジアの結合と平和のために果たした偉大な役割のために日本を研究しなければならないと思う時代がこなければならぬと私は思うのです。

もうひとつだけ我々の生き方について考えてみたいと思います。それは英語で申しますとDoing とActingの話です。これは最近私が研究しているハンナ・アーレントの思想からとりあげたものです。Doing もActingも翻訳しようとするのは難しいのですが、ある方はDoing を「処理すること」、Actingを「行動すること」と訳しています。

Doing はある目標をたてて、その手段を選んで成功させることです。Actingというのは目標をたてるのではなく、今のニードに、今要求されていることをするという事です。ハンナ・アーレントは、イエスが十字架にかけられた時に祈られた言葉「父よ、彼らをお許し下さい。彼らは何をしているかわからずにいるのです」(ルカ

による福音書23章34節)を引用して、我々は自分が為すことがどういう結果を産み出すかわからないのだといいました。

聖書のマタイによる福音書25章の言葉では「あなたがたは、わたしが空腹のときに食べさせ、かわいていたときに飲ませ、旅人であったときに宿を貸し、裸であったときに着せ、病気のとくに見舞い、獄にいたときに尋ねてくれたからである」といわれていますが、これはActingの方です。何か計画を立てて手段を選んでしたではありません。ナチスのようにユダヤ人抹殺を目標にしてあらゆる手段を講じてするDoing の世界とは異なるものです。

よき目的のために悪しき行動をする、悪しき手段を選ぶ、これは世界の中に悪をつけ加えることとなります。悪しき目的のためにでもよき行動をすると、今度はそれは世界に対して善を加えることになる、というのであります。

大変なことを言っているのであります。私はこの例としてあまり適切なものを考えつかなくて悩んでいます、こういうことが言えるのではないかと思います。

戦争が起こったとします。そうする

と戦争という目的を達成するためにはどんなことをしてもよい、とあらゆる手段が使われるわけです。そのときにある負傷した人がいるとします。戦争をするためにとはいっても、その人を見捨てていくことはできないと思って、そこに停ってその人を助けるとします。その戦争という目的にとってはマイナスになったかも知れません。しかしヒューマニティにおいて、その人を顧みたということはどう考えればよいのでしょうか。はたして戦争の目的のために一生懸命人殺しをしたということが歴史の中に善を残すのか、あるいはその目的に反して、傷ついた人をかえりみた、これが歴史に善を残すのか、どちらでしょうか。

アーレントは「時間が過ぎてみると歴史に残されて我々に感動を与えるのは、目的のために悪しき行動をしたことではなく、その目的が達成されなくてもその時に自分の隣りにいる人のために善を働き、隣りの人の悲しみに共感をもって対したことが、これが人間の歴史の中におけるすばらしいこととして我々の中に残って我々を励ますのである」と言っているのです。

このようにキリスト教の教えというのは、たとえば「5ヶ年計画をたてな

さい」ということではありません。キリスト教はActingの世界です。

今、この1時間を自分の勉強のためには損すると思っても、友人のためにこれが必要なら、犠牲にするということが人間の社会を豊かにすることになるのです。これがキリスト教の考え方です。

これからのキリスト教

結びとしてお話ししたいと思います。エーリッヒ・フロムに『正気な社会』という著書があります。その最後のあたりで「文化的変化」について述べていますが、それをしめくりながら、たぶんこれから宗教は「人類の統合に応ずるような普遍的性格」をもつ宗教にならざるをえないだろうと。

我々は今までキリスト教にあってもたくさんの分裂を経験してきました。人間を平和にするよりは分裂させたことの方が多かったかもしれません。そういう宗教は過ぎ去ってしまうでしょう。世間のあらゆる力が、人間を分裂せしめてきたなかで、いまこそ宗教は人間と人間を結びつけるという役割を果たさなければならないでしょう。

そしてフロムは「そのとき、宗教は

その教義をそんなに大事に思わなくなるだろう」というのです。「その教義は現代人の合理的な洞察力と矛盾しない、教義的な信仰よりも実際生活を強調することとなろう」。そして「人生にたいする尊敬の精神と人間の一致団結に役立つ新しい儀礼と芸術的な表現形態をつくり出すことになろう」と言っています。そして彼は宗教は決して発明されるものではなく、時期が熟してくれば、そのような宗教がだんだんと実ってくるであろうと考えました。

最後に私もアンゲロプロス監督の手法にしたがひまして、再び「霧の中の風景」を思い出してみたいと思います。

私はそういうような時代になることによって、キリスト教のメッセージは単に教会の中にとどまるのではなく、ますます人類全体の普遍的なメッセージとなっていくであろうと思います。ここで何故アンゲロプロスが映画芸術における最高水準の作品を作る中で、聖書のみことばをとりあげなければならなかったか、おわかりになれるだろうと思います。

今は闇が濃いのです。霧が深いのです。そのように見えるのです。お姉さ

んのヴァー、弟のアレクサンドロスをつつんでいた霧が、だんだんと光がさして、少しずつ晴れてきます。その光が教会だけにさすのではなく、広い世界にさしてきます。その中で教会はその存在の意味を確かめていくことでしょう。

これが今日キリスト教がわれわれに与えているメッセージなのです。

(1990. 6. 8. 宗教部主催「春の宗教講演会」講演)

東アジア文化圏における日本と韓国

私はこの名古屋学院大学には、特別の思いがあります。以前にこの大学に来ないかという話があったのですが、いろいろな事情で実現しませんでした。そんなことで私は責任も多少感じている次第です。

今日は本格的な比較文化の話をするとか、日本と朝鮮との間の国際関係の話をするというよりは、少し私の「自分史」のようなものをお話ししたいと思います。みなさまの御参考になれば幸いです。

今の私の考え方、思想とでもいましょうか、そういったものに到達するまで、どういう過程を通過してきたかということをお話ししたいと思います。

私が日本と出会うことによって、どのような思想的変遷を遂げたかという話です。それが私の自分史です。

私は1972年の10月の末に来日し、東京大学で少し勉強したのち、東京女子大学の客員教授になりました。その後

17年間にわたる日本人との出会いの中で感じるいろいろなあり、それが私に疑問を持たせ、それを解くために、歴史的あるいは思想的に勉強しなければならなかったのです。

たとえば私は日頃、女子学生を教えていまして感じるのですが、彼女らはあまり質問をしません。あるいは発表させてもどうも要領を得ません。どうして自分の考えをはっきり語ろうとしないのだろうか、または語れないのだろうかと思うのですが、後からレポートを出させると、実に理路整然とした立派な内容のレポートを提出するので、これはどうしたことなのでしょう。韓国の学生だったら、たぶんこの逆でしょう。よくしゃべるけれども、書くとすると、それほどよい文章は書けないということをしばしば経験いたしました。この違いは何なのでしょう。これは一例ですが、こんなことを日常生活のなかで疑問に思い、それを解かなければならないと感じてきました。

現在の日本には、消費の面では世界のあらゆるものがあり、無数の選択が可能です。

また学問の世界でも日本はデパートのようです。たとえば世界のどこかで本が出版されると、すぐ日本語に翻訳されて本屋に並びます。日本はたぶん世界中のどこよりも学問的情報が豊富であるといえるのではないのでしょうか。韓国などは、とうていそうではありませんから、その点では私は日本で多くのことを学ぶことができ、よい条件の下で勉強できるといえます。

しかし私は、日本にきてから18年近く、韓国へ一度も帰っていないのですが、心の中ではいつも「すぐ帰れるだろう」「来年は帰れる」と思っていました。

最近読んだ本の中で、ドイツ人でアメリカに亡命した知識人たちが、自分の家を持つとしなかった、家具を整えようとも思わなかったということを読みました。それはすぐナチスが崩れて、ドイツへ帰ることができるのだと思っていたからでした。いよいよナチスが崩壊して、帰ろうと思ったときには、もうすっかりアメリカに根をおろしていた、ということです。彼らはアメリカで彼らの学問の世界を築いていっ

たのでした。

最近、私も定年退職が近くなりまして、韓国に帰ることを考えて、そんな本を読みながら、自分の歩いてきた道を反省しています。今まで私が日本とかかわりながら、思想的にどんな変遷をとげてきたかを考えます。まず二つのことを前提として申し上げてそれから本論的なことをお話いたします。

一つは、我々が歴史の前に立たされた時、常にとまどいを感じる、ということ。

E. H. カーとアーノルド・トインビー

E. H. カーの『歴史とは何か』の中に「未来だけが、過去を解釈する鍵をあたえてくれる」という言葉があります。歴史は決して完結しませんから、ある程度先に行ったとき、それまでのことが、初めてひとくぎりの歴史として見えてくるのだ、という意味だと思います。

最近、中国の天安門事件の一周年を迎えましたが、それに対して私のゼミの学生が非常にすぐれたレポートを書きました。多くの文献から、民主的な学生の立場で、天安門事件を整理したのでした。私は中国が専門ではありません

せんから、読んでからその専門の先生に読んでいただいたのですが、学生が「権力欲にとらわれた残忍な中国の指導者、支配的少数者は……」と書いたことに対し、その先生は「そんなことは言えないのじゃないか（いかにも政治学者らしく）学生たちが自由の女神像をもちだしてあんなことをするから、こういう不幸なことが起こるのではないか」と、ややたしなめるようなコメントを書かれました。それを見て私はおもしろいと思いました。

歴史上、天安門事件は中国において、また東アジアにおいて、ほんとうは何を意味したのかは、もう少し先にならないとわからないのではないのでしょうか。これが歴史というものです。

私は日韓関係を考えるときに、自分としても非常に戸惑いを感じるがあります。

日韓条約が締結されたのは1965年ですが、そのとき私はある雑誌社の編集主幹をしていました。あのときは韓国の知識人はほとんどが日韓会談に反対しました。わずか5億ドルで今までの植民地支配を清算しようとするのか、と言って韓国の知識人はことごとく立ち上がって日韓会談に反対したので

す。私はその渦巻のなかにあったのですが、いまそれを考えると一体あれは何だったのかという思いに駆られます。

確かに日韓条約を締結しようとする勢力は独裁的な軍人勢力であり、よくない勢力でありました。しかし、韓国の経済について申し上げますと、私が韓国を出た17年前に、16億2400万ドルだった輸出総額は、去年は625億ドルになっています。16億ドルの経済が625億ドルになったということは、日本をぬきにしては考えられないのです。あるいは1965年の日韓条約締結を抜きにしては語れないことなのです。

だからといって韓国の経済が、今みんなうまくいっているというわけではありません。しかし多くの問題をはらみながらも、韓国経済があれだけ膨張して既に大量消費社会になったということを見ると、あの当時、私たちが日韓会談を反対したということはどういう意味を持っていたのでしょうか。

最近そんな問題を考えていますが、私はこれに対する答えになる言葉を哲学者フリードリッヒ・ニーチェの言葉からひとつ発見しました。それには今日午前中にお話した doing と acting

のことを思い出してください。

あの時はとにかく軍事政権、独裁政権の下で日韓条約を締結することはよくないのだと反対したのです。これはまさに acting の世界ですが、これはどういう意味をもつのでしょうか。

ニーチェは「問題はそれがいかに、生命を励ますのかにある」というようなことを言っています。

あのときに反対したということは、それによって、日韓会談をしていなかったら、その後の韓国がどうなっていたかはわからないとしても、それは命を励ますことであつたし、その社会、その時代に命をあたえることであります。たぶん将来、歴史においてもそのとき我々が闘ったことは、偉大なる闘争として記録されるのではないのでしょうか。これが歴史なのです。

そういう意味で自分が歩んできた歴史を振りかえって見るとき、多くの戸惑いがあるのです。

つぎに申し上げたいのは、アーノルド・トインビーが私に与えたたくさんの影響についてです。

さきほどの「戸惑い」は歴史、過去に向けての話しだとするなら、これは未来に向けてのお話です。

トインビーは、「人間は自己を越え

ることによって、自己を実現できる」存在であつてこれは人間に与えられた「輝かしい特権」であると言うのです。

今、私は以前、日韓会談に反対したということ思い出しながら、私なりにこれを越えようと考えているわけです。

またトインビーは「一国の歴史というものは地方史にすぎない」と言ったのです。彼にとっては文明史が問題で、我々の立場でいえば東アジア史を考えるのが当然であり、日本史とか朝鮮史とか、また中国史とかは、local history、地方史であるというわけです。

彼がそう考えるようになったそのは、第一次世界大戦、第二次世界大戦を経験し、「国家」というものによって、いかに悲惨な歴史が展開されているかを、痛切に感じたからです。そこでどうすれば近代国家ができる以前の文明の歴史、ヨーロッパ全体の歴史にもどるか、ということを考えました。

1940年代に既に彼は世界統合を考え、ヨーロッパ統合をさかんに主張した人です。そうでないと戦争を防止することはできないと考えたのです。彼は、いま流行の言葉になっている脱国

家、超国家、ということ堂々と主張しました。いまから思えば先駆者であります。預言者であります。

彼は「国家は19世紀にできあがったものである。歴史のなかに現れたものは、歴史のなかでいつかは、消えていくものである」と考えました。そして「国家は文明のふところに現れてくるものにすぎない。国家の歴史は短い」と考えました。

我々の場合はどうでしょうか。私は韓国人の反日思想も理解できるし、日本にきて日本人が朝鮮人を差別することもみてきました。こうしてどうすればこの「国家」というものを越えて考えることができるか、東アジアの平和を追求することが出来るか、いままでの自己を越えることによって、人間に与えられたこの輝かしい特権によって、東アジアに新しい時代を作っていくのか、それを考えざるを得ません。

韓国と日本の両国が国家主義に陥っているかぎり、我々は不幸をくり返すのではないのでしょうか。

日本との出会い

むかし、紀元4世紀から6世紀頃、朝鮮の南部に伽耶(カヤ)という国が

あり、任那(ミマナ)日本府があつたと『日本書紀』に記されています。それを歴史上の重要なこととすることに、私はとても批判的です。

国家の形成もさだかでないようなあの時代に、たとえ任那日本府があつたとしても、—それも日本書紀にだけ記されているのですが、それは移民の部落であつたかもしれません。少なくとも、決して日本の国家の代表ではないでしょう。その時代は朝鮮人も日本にきて、どこかに村落を作っていたかもしれません。それを後から国家主義的な考えで、我々日本人は他民族を征服した、それで偉大な民族であると書き換えたのです。私はこれは国家的な、特に近代の国家主義的な歴史観によって、何でもないことが彩色されたものである、灰色化したものであると思います。ほんとうは生き生きとした人間の交流であつたかもしれないものを、帝国主義的に他国を支配したことが偉大な歴史であるという考え方から、事実を歪曲し、書き換えたとは私は解釈します。子どもたちが学校で他の子どもをいじめることが偉いことでしょうか。それと同じことです。人の国を征服することは偉いこと、立派なことであると、自分の国の偉大さを誇る

という発想自体が、正気ではないのではないのでしょうか。狂気とさえいえるのではないのでしょうか。

よその国を過去においても支配したことは恥ずべきことであります。平和志向的な今日においてはとりわけそうです。

そういう国家的対立があるにもかかわらず、我々朝鮮は平和の仏教を伝えようとして努力し、芸術を伝えようとし、文化を伝えようと努力したのでした。こういう偉大さをなぜ強調しないのでしょうか。

それを強調するためには、我々は国家主義的な歴史観ではなく、文明史的な歴史観をもたなくてはなりません。東アジア的文化という視点をもたなくてはなりません。

これが今までの我々を越えていく、人間に与えられた「輝かしい特権」を行使する道ではないかと考えます。

こうしてみると大変な問題があるのです。日本は日本で、朝鮮なんかからは何も学ぶべきものはないと軽蔑し、差別して、「上を向いて歩いて」ばかりいるのですから、朝鮮から学ぶべきことがあってもそれは決して見えてこないのです。

一方、韓国人はどうであるかといえ

ば、日本というのは、過去にわれわれを不当に支配した国だ、と常に敵として見るわけです。だから長い間、敵から学ぶことなんかはないと思ってきたのです。日本にもいいものがあるとしても、それは西洋から学んできたものなのだから、直接西洋から学べばいいのだ、何で日本から学ばなくてはいけないのかと彼らは考えたのです。

だから日本においては朝鮮研究が不在であるし、韓国においては、あるいは朝鮮全体においては日本研究がまったく不在であるという、文化不在の状況を我々はおたがいに作っていたのではないのでしょうか。これはこの頃のことばでいえば、おたがいが国際化を拒否していることであり、過去における支配、被支配の不幸なる政治的関係から生れたものであります。

我々はいずれにしろ、いつかは東アジアのために、国家という狭い枠を越えなければなりません。

それではもっと私の自分史に近く立ち入ってお話しましょう。

最初に私が言いましたように、私がいまのような考え方または思想をもつに至った過程をお話したいと思

私は日本による朝鮮統治時代に中学生でした。植民地の公立学校ですから、先生は主に日本人でした。44名の先生がいましたが、そのうち朝鮮人の先生はたったの4名でした。当時は4年生になりますと日本に旅行をします。日本に旅行をする主な理由は伊勢神宮参拝と宮城遙拝でした。そのとき私は肺が悪いと嘘を言って日本に来ませんでした。ほんとうは抵抗していたのです。それで先生に色々いじめられました。がんばりました。

というわけで、私のはじめて日本に来ましたのは、1965年の12月のことです。それは、ある雑誌社の招待によるものでした。そのとき私は『思想界』という雑誌の主幹をしていました。その初来日の時、私はとてもおもしろい経験をしました。1945年以前に私は何人もの日本人を知っていましたし、戦争が終る頃には、私は小学校の先生をしていましたから、日本人の教師たちと一緒にいました。ですから日本人と韓国人とは、別に顔が違ってはいるわけではないと、よく知っていたにもかかわらず、その後20年も日本人に会っていませんでしたから、羽田空港に降りるまで、私は日本人と韓国人とはまったく異なる、別の人間だというイメージを

造りあげていました。極端に言えば、日本人には角でも生えているような感じがしていたのです。反日的な教育の結果も少しはあるのですが、そういうイメージを持っていたのです。それが羽田空港に降りた瞬間、「あっ！この人たちは我々と同じ顔をしている」と思ったのです。そして何度か、韓国語で話しかけて、相手にけげんな顔をされて初めて、「そうだ、ここは日本だ」と思ったことがありました。これはどういうことでしょうか。みなさん考えてみてください。

それから「韓国と日本はすべてが一緒だ」という発想で、全部のものごとを見るようになるのです。何を見ても「同じだ」という発想から出発して、「異質である」ということは見えません。私の最初の日本の社会との接触は、日本は我々と同じであるというものでした。

これについて具体的に申しますと、私の本のなかにも書いてありますが、まず龍安寺での経験です。この最初の来日のとき、京都の龍安寺にいったのです。龍安寺は私の日本研究の原点です。石庭に向って縁側にすわっていると、思っていたより小さいこの庭に私はすっかり魅せられて、吸い込まれ

るような感じがしました。その場所から立ち上がれないような何かを感じたのです。それは何かものすごい親近感のようなものでした。一時間もそこに座っていたでしょうか、促されてそこを立ち、こんどはみなさんもよくご存じでしょう、鏡容池という池がありますね、そのほとりに座って、いろいろな思いにふけりました。

そのとき、日本に来るまで私は日韓会谈反対のデモに参加したり、また講演をしたり、あるいは物を書いたりして、さかんに闘いました。だからそのとき、龍安寺の庭にこんな魅せられるのは、植民地下における日本帝国主義の教育のせいだと思い、これをふるい落さなければならぬ、と思ったりしました。しかしそう簡単にふるい落せなくて、そのまま10日くらいの日本旅行を終えて韓国に帰りました。

韓国に帰ってから、その謎を解くためにいろいろと考えてみました。素直に考えて、植民地時代の日本の教育のせいだけとはどうしても思えない、何かそこに魅せられる理由があるに違いないと考えたのです。ヨーロッパ人が日本に魅せられるのとは違った何か、韓国人である私のなかにはあるのではないかと思いました。

文化伝播の法則

そのとき私は、韓国の軍事政権に追われて山のなかに隠れていたのですが、その隠れ家で読んだのがトインビーの本『試練に立つ運命』でした。実はそのとき、学校の先生という職業も追われるかもしれないから、翻訳でもしたらと人から勧められ、その本を翻訳したのです。まったくの偶然です。そこではじめて私は龍安寺の文化、日本の文化に、韓国人である私が親近感を持った理由を見つけたと思いました。

トインビーはこういうのです。「文明の中心から距離的、時間的に遠くなればなるほど、中心の文明とは違ったものになる。しかし距離的、時間的に近い所では、中心文明の言葉すら使う」と。

トインビーは、コインが伝えられる過程を例にあげています。紀元前4世紀頃にマケドニアのフィリップ王が金山銀山を開発して、金貨銀貨をつくりました。そのコインの作り方が、200年の歳月をかけてずっとイギリスにまで伝えられていくのです。私はトインビーを読んでからずっと後に、大英博物館で、このだんだん伝えられていく

コインがならべてあるのを、実際に見たことがあります。そこには非常に簡単な法則があります。

私はそれを文化伝播の第一法則と言っています。たとえば誰かが静かな池に小石を投げると、その波がだんだん伝わっていきます。その波はだんだんうすくなって最後は消えてしまいますね。これと同じです。ギリシャのコインがイギリスまでいく間に模造されますが、ほんの少しずつ違っていきます。コインに刻んだ皇帝の顔が少しずつ薄れて、最後は何だか分からないシンボルみたいになっています。その移り変わりを見ると、まるで波が少しずつ弱くなっていくのを見るようです。ギリシャの文明がそんなふう伝わっていくのです。

中国を中心にした東アジアの、かつての古代文明は、日本にくる間に朝鮮を通過してきました。ですから日本にある文化というのは朝鮮がもっている文化の延長線上にあるわけです。そしてわれわれのそれよりも、中国的な香りといましようか、中国的なものを多分に失ってしまったものとして、日本に来ているはずですが、実際そうですが、上ったり下がったり訓読みした

り、いろいろします。韓国人は音読みしかしません。中国の場合とほとんど同じで、棒読みをして、そこに「てにをは」をつけるだけです。地理的に中国により近いからです。

ここでもう一つ、文化伝播の第二の法則とでもいうべきことを説明しなくてはなりません。

ギリシャのヘレニズム文化は、東に向ってやってきます。これがたまたまアフガニスタンあたりで、インドからやってきた大乘仏教と出会います。こうして偉大な文明どうしがぶつかりますが、それはまるで波がぶつかりあうようなものです。トインビーはそれをスパーク、火花が散るようなものだ、というのです。

私はこれをインドで確認しました。インドにギリシャの彫刻が入ってきて、インドの大乘仏教と出会うと、ガンダーラ美術があらわれるのです。それはニューデリーの博物館にいけばあきらかです。それまでは仏像といってもまるで石ころのようなものです。それが紀元一世紀前後にして、あの美しい仏像に変わっていくのです。しかも我々がよく知っているようにように南方の仏像というのは、女性の身体をそ

のままあらわしているような美しい仏像です。生き生きした人間的仏像に変わっていくのです。

それが流れ流れて、中国から朝鮮に、また日本に伝わるのです。

ここで私が問題にしたいのは、こうして大陸から伝わった文化が、日本にそれまであった文化ともう一回ぶつかるということです。日本は島国ですから、大陸から受け入れた文化がここで根づきますが、それにまた新しく大陸からやってきた文化がぶつかって、新しい日本文化が形成されたのではないかと思います。

それから私は最近、南方文化説をとなえています。今までの考古学的研究を調べてみると、どうも朝鮮の南には、かなり強い南方文化が入っていたようです。これは縄文時代晩期あたりだと思いますが、日本にもその南方文化が入っています。だから最近日本語の起源を南インドのドラヴィダ語に求めたりしていますね。最近韓国でも韓国語の一部のなかに、ドラヴィダ語が入っていることを研究する学者があらわれました。

だから日本では歴史時代以前に、南方文化が入っていて、その南方文化と北方文化がぶつかったのかもしれない

ん。そこで火花が散って日本文化はもう一步前進したでしょう。近代以降は、日本の文化のなかにヨーロッパ文化が入ってきて、火花を散らし新しい段階の文化をうみだしてきたといえましょう。

いずれにせよ私は「龍安寺の庭」に魅せられる理由があったのだ、決して日本帝国主義教育のおかげだけではないのだ、と充分納得するようになりました。

文の文化・武の文化

もう一つ自分史との関連で、お話ししたいと思います。私は1972年に日本に来たとき、九州を訪ねました。アメリカでいっしょに勉強した友人が、古い料理屋に案内してくれました。確か古香園というところであったと思います。食卓の上を見廻すと小さなお皿に松の実が5つおいてあるのがありました。食べ物としてはほとんど価値はないのです。でもじっと見ているとそれは一幅の絵です。私は笑いながら「日本人は残酷ですね。これを食べることによって、美を破壊しているではありませんか」と言いました。その松の実を前にして、私は「ああ日本と韓国は

違うな」と思いました。

さきほどは「おなじだな」と思った話をしました。そして今度は「違うな」と思ったのです。韓国人は多分そんな料理は作らないと思います。大きなお皿にたくさんのお料理を盛り付けます。

そうしてみると例えば、日本には色彩を表す言葉が非常にたくさんあります。視覚文化的です。視覚文化の背景のもとに俳句などもできあがっていると言えるでしょう。

いつか新聞で読んだのですが、日本には色をあらわす言葉が3000語もあるそうですね。一方韓国は、聴覚を表す言葉が、ものすごく発達しています。たとえば水の流れる音、日本語なら、サラサラとかザーザーとかでしょう。韓国語ではザルザル、ジョルジョル、ジュルジュル、チュルチュル、チョルチョル、クワルクワル、など水の音を表わすほんとうにたくさんの擬声語があります。どうしてこんなに聴覚の表音が発達したのでしょうか。この違いですね。

この違いを、どう説明していくかです。日本にいればいるほど、だんだん違いがわかってきたのです。

また、私は日本にきた初めの頃は、

日本人はあまり自分をさらけださないので、日本人と話をすると、もどかしくてしかたがなかったのですが、この頃は韓国から友人たちが来て、あまり自分をさらけだすのを見ると「いやだな」と思うようになりました。17年間、日本にいる間にこうなってしまったのです。まあ私もいったん韓国に帰れば、また率直になるのでしょうか。

さきほど E.H. カーの話をしましたが、また彼は『歴史とは何か』のなかで、簡単に言えば次のような重要なことを教えてくれました。「国民性や民族性というものは何かというと、決して生物的なものではない。バラや菊や桜の花のような差などではない。国民性の差は結局、社会的関係、社会構成の様式の差にすぎない」と。

たとえば日本のホテルで泊ろうとして「一人部屋はありますか」と聞きますと「申し訳ありません……あいにく……」といえます。それがアメリカだったら一言「No」です。最初私はアメリカでそれを何とも思わなかったのですが、この頃は「No, thanks!」と言われると「いやだな」と思うようになりました。そういうように人間関係が、それぞれ違うということです。

日本人的関係と韓国人的关系とアメ

リカ人的関係とは違う、ということが実際は国民性の違いを表すのであるということを、E. H. カーは言っているのです。たとえば家族関係が中心であるのか、あるいはいわゆるタテ社会が中心であるのかということもあります。

その点、韓国人は家族に対する忠誠心は非常に強いのですが、会社に対する忠誠心は弱いと思います。日本人はその逆であるかもしれません。

日本に来て、学生たちとのゼミ合宿でのことですが、夕御飯の時に、さあ食べようとする、みんな箸をとろうとしないのです。私は変だなと思いましたが、だまって待っていました。するとゼミ幹事が大きな声で「いただきます」と言うと、それでみんなも「いただきます」と言って、食べ始めました。これは韓国では見られないことです。きっと勝手に食べるでしょう。

日本人は挨拶を合唱するのが好むようです。 「さようなら」という時も合唱です。きれいですけれどね。

これは社会関係の違いです。

こういうこともあります。これは私の韓国人の友人に、作家の司馬遼太郎さんが——これは司馬遼太郎さんに確認はしていないのです。その友人の話ですが——こういうことを言われた

そうです。「小説を書くために韓国の田舎の結婚式を見に行ったら、その婚礼の儀式を指導するために、たくさんの古老たちがみんなが口々にああでもない、こうでもない」と議論するので、それで式が延々2時間も続いた」と。

日本ではこういうことはないでしょう。誰か一人が指揮すれば、その人に任せるでしょう。後になって反省会でもして意見を述べあうかもしれません。

私の友人はそれに答えて「私は香港に行った時、実におもしろい光景に出会ったことがある。ナイト・ツアーで日本人の団が、あるクラブに入ってきました。ショーが一番おもしろいところにさしかかった時、誰かが三角の旗をさっとあげました。すると全員がさっと立ち上がり、静かに出ていきました。韓国人ならこんなにおもしろいのに帰るなんて、と必ず誰かが言ったでしょう。あるいはみんな帰れ、私は一人でも残って終りまで見ていくからと言ったでしょう」と言ったそうです。

それに司馬遼太郎さんは何々大笑されたそうです。

この違いををどういうキー・ワード

で、またパラダイムで解いていくのか、というのが私どもの問題です。

私はそれに対する一つの答えとして、日本の社会は長い間「武の社会」の伝統を持ってきたし、韓国の社会は長い間「文の社会」の伝統を持ってきたからだ、といえると思います。

日本は幕藩体制だけを見ても、300年の武士社会を持っていたわけですが、韓国は朝鮮王朝だけを考えると、その500年間はまったく儒教社会であって、武装しない社会でありました。だから豊臣秀吉が攻めてきた時も、抵抗する力がまったくありませんでした。武装が解除された社会なので、最近の研究によりますと、豊臣秀吉軍がいまの釜山に攻めてきたときは一万八千人余りの軍だったそうですが、朝鮮の守備兵はわずか二十人だったそうです。

武士の「士」という文字を書けば、日本では剣をもって戦う武士を考えますが、韓国ではそうではありません。それは「士大夫」です。そのように違うのです。

これを縦軸にして、キー・コンセプトにして、調べてみるといろいろおもしろいことがあります。

井上清の岩波新書の『日本の歴史』

の上巻の「戦国大名の特徴」という所に「斬取強盗は武士の習い」とか、あるいは「男子は家門を出れば三人の敵あり」とか言われたと書いてあります。それだから気をつけなければいけないということでしょう。

韓国は武装されていない社会ですから、こういうことはありません。ほとんど同族村落です。ですから、そこには礼儀はあっても掟はありません。

そこで私は「武と文」を軸にして日本と朝鮮を比較してみたいと思ってきました。

日本が文禄慶長の役のときに朝鮮に侵略してきた時も、単に軍事的衝突というだけではなく、思想的に衝突したといえましょう。どういう思想的衝突かと言いますと、朝鮮の方は「なぜ、理由もないのに、罪のない我々を攻めてきて殺すのか、それは日本人が好戦的で野蛮人であるからである」と考えます。

日本人の場合は、その時たった二週間でソウルまで占領してしまいましたから、朝鮮に対して「敵が来るとただ逃げ回るだけだ。何というだらしない国であろうか」と思うわけです。

それは「武」の社会から見ればそうでしょう。唾棄すべき国民でしょう。

こういう考え方のずれが、ずっと続いていくのです。それが1910年の日韓併合に至るまで、ずっと続けられました。

これはどちらが良いか、悪いかの問題ではなく、異った社会体制の衝突の歴史として、認識しなくてはなりません。あるときはそれが長所になり、またあるときは短所になりましょう。

東アジアの平和にむけて

このような過去の対立を未来にむけて、どう考えたらよいのでしょうか。未来をどう展望するかによって、今日、我々がどう行動すべきかが決まるのではないのでしょうか。未来をどう展望するのかといえば、非常に明らかなことは、東アジアに平和をもたらさなければならぬということでしょう。

我々はたがいに戦ってきた過去を越えていかなければなりません。ある点では我々は国家をも越えなければなりません。それが未来への歴史の方向だとすると、そういう観点でもう一度、歴史を見直さなければならぬのではないのでしょうか。

そこでそうでなかった我々の過去の歴史、支配することを誇りに思った日

本の歴史観、支配されることを恥じた朝鮮の歴史観、これはマイナスの歴史として解体されいかななくてはなりません。

東アジアの歴史を見ますと、非常におもしろい時代があります。それは、7世紀後半から長くみて、10世紀の初頭まで、200年から250年の間です。古代文化が花咲いた時代です。日本は奈良と京都に文化が花咲き、中国は長安を中心に唐の文化が花咲き、朝鮮においては慶州を中心に新羅の文化が花咲きました。

いま我々が古代文化といえば、皆そこに帰っていくのです。韓国に観光旅行にいらっしゃる人は皆、慶州ばかりいきますね。日本でいえば京都、奈良であるでしょう。

この時代というのは大変重要なのです。そしてその前の時代はどうかというと、朝鮮半島を中心にして、東アジアが乱れに乱れた時代なのです。中国では隋や唐が現われます。朝鮮半島では高句麗、新羅が戦い、663年には日本も滅んだ百済を再興しようとして攻めてくる。そんなふうになります。私はこの新羅が統一する以前、7世紀後半以前の時代を東アジアの戦国時代だと言っています。

そしてその後、新羅が統一された後、東アジア三国の間で、非常に美しい文化の交流がなされました。そうしますと次のように言えるわけです。

朝鮮半島が平和を保つと東アジアは平和になる。これに日清、日露の戦争のあった近代史を重ねてみてください。

そのとき両国民は同じような仏教文化を、しかも和らぎの仏教文化を持っていました。同じ価値観、同じ文化を持つことが平和の条件であったのです。

また同じような社会体制を持っていました。みんな唐の制度を真似した律令体制です。しかもこのような平和の時代になる前に、戦争がさかんにあったにもかかわらず、いっしょうけんめい仏教を、また文化を伝えた、この情熱が次の時代に花咲いたといえます。

近代においても朝鮮半島を中心にして、乱れに乱れていた歴史を考えてみましょう。日本が覇権を主張して、支配した時代は決して平和ではありませんでした。対等な関係に立っていなければ平和な時代とはいえません。

さてトインビーは何と言っているのでしょうか。彼はほんとうに先見の明があったと思います。まさにこの頃のヨーロッパを予言しています。彼がどのくらいの重要性をそこに持たせて言

ったかはわかりませんが戦後間もなく「おたがいに統合し、平和を保ち、おたがいに結びあうような社会になるためには、高度の同質性homogeneityを持たなければならない」というようなことを言っています。

いま世界は高度の同質性を求めているといえるのではないのでしょうか。地球共同体をめざしてです。

この前、ミッテラン大統領がそのような東欧の社会に対して西欧社会との同質性を求めました。それはまず複数政党を持たなくてはならないということです。そのつぎは市場経済を持つことです。そして人権や政治や自由を尊ぶ社会になるということです。まさにこれです。

たぶん東アジアでもこのような同質性を求めて、これから悩んでいくことになるだろうと思います。

私はこのたびノ・テウ大統領が来日したことについては国内政治的に批判を持っているほうですが、しかしそれが果たした役割も同時に評価しています。

日韓関係を考えますと、経済はもう既に国境を越えています。経済が国境を越えたがゆえに、政治的にも何等かの形において、国境を越えていか

なくてはならないということが今後の課題になることでしょう。経済が越えていったのに、政治が越えていくことができないと、おたがいにいさかいがおこって結局、大変なことになるのです。

たぶん朝鮮半島の南北問題についても同じことがいえるでしょう。私は決して南が民主的になったと考えてはいないのですが、いずれにしろ南北朝鮮はこれからいかに同質性を回復するかということが問題です。東アジアの平和のために朝鮮の安定をこれからどう導き出すのか。さきほど申しましたように、朝鮮半島の平和は東アジアの平和のキーです。だからそれは日本の今後の道と決して引き離すことのできない問題なのです。

私は17年間、日本にいて、多くの先生方、友人たちに励まされ、支えられ、また直接的に助けられました。そしてようやく到達した地点とはこのようなものであります。こういう思想をもって、これから韓国に帰りたいと思っています。

(1990.6.8. 名古屋学院大学附属図書館主催ライブラリ・セミナー「平和と人権・総合学習」における講演)

チャペルブックレット 発刊にあたって

本学の開学(1964年)以来、宗教部では毎年、春と秋に「宗教週間」を設けて、折りにかなったテーマと講師を与えられて、学生諸君と共に学んでまいりました。

その講演内容は、宗教部の機関紙「麦粒」に掲載してまいりましたが、貴重な講演を、いつでも手にとって読める形にまとめてはどうかとの提案を受けて「チャペルブックレット」として発刊することにいたしました。

このチャペルブックレットが、本学の学生諸君をはじめ、多くの方々に刺激を与え、問題を提起し、より深い認識と行動へかりたてるきっかけになることを願っています。

1989年11月

宗教部長 梶原 寿

チャペルブックレットNo.4

1991年1月25日発行

編集・発行 名古屋学院大学 宗教部

瀬戸市上品野町1350

〒480-12

TEL 0561-42-0348

印刷 坪井印刷合資会社

1,000

チャペルブックレット

●既刊

- No.1 経済の論理と人間の論理
エコノミック アニマル日本
恵泉女学園大学教授 塩 沢 美代子
- No.2 心を問い続けて
北海道家庭学校校長 谷 昌 恒
- No.3 国際化時代におけるキリスト教の使命
韓国の視点から
梨花女子大学教授 徐 洸 善
- No.4 激動する現代史と神のみことば
東京女子大学教授 池 明 観